『わだつみのこえ』 日本戦没学生記念会　2009 年　30 号　34-42 頁

手記を読む ――「事実」への旅

青木　秀男

只今出撃致します。想い残るもの一つもなし。私ごときものの死生、問題とするに足らず。我、任務さえ全うすることできれば本懐なり。神州絶対不滅。[北川,1967:94]

あと一月の生命に、何の装飾もない私を見つけだそうとの私のあがき。私には、もう自分自身でなくなってしまっているようだ。―（中略）―よくもかくまで生きながらえたものと　よそびとは泣くかも知れぬような私の毎日。[日本戦没,1995:384-385]

生の全体

戦後 60 余年。戦争の記憶は遠い。しかし戦没兵士は、しばしば人々の記憶に蘇る。ある人は、兵士は颯爽と死に臨んだという。ある人は、兵士は苦悶して死んだという。ある人は、兵士は「天皇陛下、万歳」と叫んで死んだという。ある人は、兵士は「お母さん」と呼んで死んだという。いずれが真実なのか。いずれも真実なのか。軍隊に入るとき、兵士は死を覚悟した。そして戦場で死んでいった。生から死への道程は長かった。ゆえに死に様は多様であった。兵士の生と死の真実は、その全体のなかにある。全体を切り刻んで生と死を論じることは、死者の冒涜である。生者は、死者が遺した言葉のなかに、無数の生の軌跡を認める。戦没兵士の研究はここから始まる。ある学徒兵は書いた。「国に殉ずるということ、戦死するということ――それは何も犠牲といわれるべきものではなくて、ある人間の、ある時代における生き方――必死の力をこめた生き方そのものなのである」[日本戦没,1995:165]。必死の力が籠った生は、深くて重い。生者は、その事実に誠実でなければならない。誠実とは、全身を耳にし、自己の信条に不都合な事実を含め、兵士の声をすべて聞き取り、すべてを受け入れる態度をいう。そうしてこそ生者は、学徒兵の必死に応えることができる。

私たちは、戦没兵士の＜生の全体＞（兵士の精神の全体像）をどうすれば把捉できるのか。せめて、どうすればそれに接近できるのか。これが問題である。筆者はいま、学徒兵の生と死の世界を渉猟している。しかし、学徒兵の＜生の全体＞を知ることはできない。聳える山の麓を徘徊する思いである。筆者は、学徒兵の手記（手紙・日記・手記・遺書・メモ）を読む。そのとき感情を抑制し、信条を禁欲し（思考を停止し）て、手記の世界に没入する。そして言葉の意味を探る。もって、学徒兵の意味世界（思想・信条・心情・感情）を追想する。しかしその道は平坦ではない。追想の行く手には、いくつかの障壁がある。まず資料の問題がある。手記はどこにどれだけあるのか。それらはどのように編集されたのか。つぎに表記の問題がある。手記はどのように書かれたのか。なぜそのような表現が用いられたのか。さらに解釈の問題がある。一つひとつの言葉はなにを伝えているのか。学徒兵は行間でなにを叫んでいるのか。学徒兵の＜生の全体＞は、それらの障碍の向

こうにある。……小論は、それらの障碍について若干の議論を行う。学徒兵の研究は、研究方法の精錬から始まる。

把捉できた「事実」

手記は個人が書いたものである。では一つひとつの手記は、学徒兵の＜生の全体＞をどこまで代弁しているのか。ここに、手記の代表性に関わる問題がある。学徒兵の手記は、庶民（出身の）兵より多い。手記は、高学歴者に偏る傾向にある[森岡 1995: 19]。「同じ戦争にたいして、学生であろうと、一般将兵であろうと、ひとしく胸奥に抱いていたはずの、しぜんな人間的感情の深い呻きや渇きを、文字に表現するだけの知的準備と、多少のゆとりとを、学生たちは持っていた」[日本戦没,1995:479-480]。なかでも、特攻隊員の手記は、他の学徒兵より多い。特攻隊員は、「自分の死期を予見できた、出撃基地が主に内地だったので手記が残りやすかった、同じ戦線から戦死者を多く出したため手記が出版されやすかった」[中村,2006:302]。しかし手記が多くとも、筆者が読むことができるのは、その一部である。出版されなかった手記もある。出版されても、入手できない手記もある。手記を書かなかった学徒兵もいる。「この社会のなかで自分を生かしうる日が来ないかぎり、ほんとうの便りは書くまいと決心していた。それは一つには上官の禁止するところに触れるからであり、より大きくは、軍の本質に関する問題を提起しないでは僕のこの環境下の状態を書くことができないからである」[日本戦没,2003:183]。書けなかった学徒兵もいる。「多くの学生たちは、軍国主義的な人間形成の結果として、自己の内部に疑惑や不信や絶望やのめざめを感じてはいても、これをつきつめていくすべを知らず、また不断にそのような内的努力ははばまれていて、よしそれらをつきつめることがあっても、機会がなければ、このような記録をのこすことができなかったのである」（傍点は原著者）[日本戦没,1995:480-481]。（14～15 歳で入隊し、「悩むべき価値がなんなのかさえ分から」[保阪,2002:109]ず、その意味世界を記述する術も十分でなかった少年飛行兵に、手記は少ない。この場合、彼らの意味世界を一瞥することさえ容易でない。）こうした手記の書き手の限定は、学徒兵の＜生の全体＞への接近を妨げる。手記が他の学徒兵の意味世界を代弁している、ともいわれる。「この本の手記は、学生だけの特殊性という面もあるが、同時に、自己の内心を、ついに表現する機会もなく、方法も知らずに、型どおりのことばだけを残して死んでいった無数の将兵、とくに若い学徒兵たちの代弁にもなっているのである」[日本戦没,1995:479-480]。しかし筆者が読んだ手記は、どこまで他の学徒兵の意味世界を代弁しているのか。筆者は、＜生の全体＞の一部を知るだけである。その一部を積み重ね、読み方の工夫を凝らして（後述）、少しずつ＜生の全体＞に接近するだけである。

加工された「事実」

学徒兵の＜生の全体＞を知ることの困難は、それだけではない。手記自体に胎まれた制約もある。手記は、書き手にとって、自己世界の呈示である。書き手は、手記のなかで自己と対話する。書き手は「書く私」であり、「書かれる私」であり、「読まれる私」である。その対話に、戦争体験が介入する。戦争体験は「書く私」を揺さぶり、「書かれる私」

を先導し、「読まれる私」を作り変える。こうして手記は、３つの「私」の対話の産物となる。「彼ら（学徒兵―引用者）は、書くことによって自己と対決し、自己の苦悩を吐き出すにはいられなかった」[大貫,2003:291]。学徒兵は、手記を書きながら（自己と対話しながら）、生と死の意味を模索し、死に臨む態度を決める。ゆえに手記は、徹頭徹尾、書き手の関心に沿って書かれたものである。手記には、学徒兵の「心のすべてが吐露されているとはいえない、手記を書くときに意識に浮かんだことだけが記されている」[森岡,1995:20]。書き手の心情は、手記が書かれた時期や、書き手が置かれた状況によって異なる。ゆえに手記の書き方も異なる。また、手記の宛先によっても異なる。換言すれば、手記は、書き手の心情が赴くまま、書き手により選択され、反復され、創造され、誇張され、捨象され、ときには誤認された「事実」（ファクツ）群から成る。その全体が、書き手の主観的な状況の定義（現実の認識）をなし、書き手の「真実」世界をなす。「真実」世界は、客観世界と同じものではない。読者は、書き手の客観世界を知ることはできない。「歴史的事実とはあらかじめ絶対的に存在し確定しているのではなく、さまざまに記述され解釈されることによってはじめてその相貌をあらわす」[成田,2001:7]。読者は、加工され、脚色された「事実」群のなかに書き手の意味世界を読みとる。では手記に書かれた「事実」は、どの程度に「客観的」といえるのか。筆者はそれを検証するために、まず手記の文章分析を行う。そして「事実」と「事実」の合理的な整合性（筋が通っているか否か）を確かめる（テクスト批判）。つぎに、他の関連資料に書かれた「事実」と照合し、「事実」認定の妥当性を確かめる。こうして、手記に書かれた「事実」の「客観性」を判定する。それをもって客観世界とみなす。

隠蔽された「事実」

手記がもつ制約がもう一つある。学徒兵の手紙は、軍の検閲を受けた（士官の学徒兵には、検閲を受けないときもあったが）。「一体、日本の軍隊内の日記や手記に對する検閲は、……後世の人々には想像を絶するほど嚴重をきわめたものであつた」[東大戰歿.1947:245]。ゆえに手記の中身は、検閲を受けた分、信頼性を損なわれる。学徒兵は、検閲をパスするよう、また親に心配かけないよう、本音を抑制し、世間並みの表現で、型通りの手紙を書いた[小田切 1970: 313]。また、「『英霊』の遺文として展示されるという上官の訓示の後で書かれた」[大貫 2003: 292-293]手記もある。ここにも過度の作為がある。こうした事情から、読者は、手記に綴られた表現のウラ、書き手の心情が隠蔽された行間を読まなければならない。しかし、そうした困難があるからといって、検閲を受けた手記に価値がないということではない。その逆である。「そのような検閲を通りぬけて、家族のもとにとどけられた手紙の不自由な文字のなかに、どんなに痛切に学生たちの人間らしい苦悩や訴えや疑惑や諦めが語られていることだろう。本書に収めた諸記録は、きわめて不完全な表現をよぎなくされながら、まさに、その不完全さを通して、ずっしりと重い人間的内容の無限の豊かさ切実さを示している」[日本戦没,1995:479]。家族への手紙の「『草々』のあとに句点（。）を付したときは、不本意ながら書いた内容であるという取り決めを、家族とのあいだで決めていた学徒兵もいる[日本戦没,2003:352]。こうして、「型通りの表現でもその背後に潜む思いに迫ることは不可能ではない」[森岡,1995:20]。しかしながら、それには限

度がある。そもそも、文章の行間を読むことは容易でない。行間の意味の解釈は、十人十色である。事情は、原資料に当っても同じである。とはいえ、検閲によりどれほど信頼性が損われたとみるかは、結局、読者の解釈の問題である。そもそも手記は、どの文章も「厚い記述」（C・ギアツ）で溢れている。そこには、多くの意味が詰まっている。しかし、手記は自らを語らない。ゆえに、手記からどんな意味を引き出すかは、読者の関心次第である。意味の抽出は、読者の主観的な行為である。こうして手記の解読は、書き手の状況解釈と読者の文章解釈という、二重の解釈を経て行われる。「過去とは現在の問題関心から形成された構築物である」[青木,2004:79]。手記とは、読者の問題関心から形成された構築物である。

編集された「事実」

最後に、手記に関わる制約がある。それは、手記の編集に関わる問題である。『新版　きけわだつみのこえ』（以下『わだつみ』）の第一集の初版は、1949 年に刊行され、その後版を重ね、1995 年の新版に至った。第二集は、最初 1962 年に『戦没学生の遺書にみる 15 年戦争』（光文社）として刊行され、その後版を重ね、2003 年の新版に至った。第一集旧版では、「反戦」が編集方針とされ、軍国主義調の強い手記は除外された。しかしこの編集方針は、批判に晒された。「ありていにいえば、『わだつみ』編集方針の基本的姿勢に欠けていたものは、使者の言葉を死者の言葉のままに、まるごとを聴こうとする『生者』の姿勢の謙虚さなのであった」[安田,1967:111]。「（『わだつみ』には―引用者）自己の運命についての悩みや苦しみの言葉が主として採録されていて、最後には人間的な苦しみも捨て去って死んでいったものの言葉は、ほとんどとりあげられていない」[保阪,2002:79-80]。新版では、これらの批判が意識され、編集者の意図が抑制された。そして、戦没学生の一人ひとりの全体像が再現されるよう、注意が払われた（『わだつみ』編集の経緯は、新版の「新版刊行にあたって」に詳しい）。このように、「日本戦没者学生記念会による『きけわだつみのこえ』の歴史は、削除や改変の歴史でもあった。すなわち、一つの『わだつみのこえ』、決定版の『わだつみのこえ』 など、どこにもないのである」[野上,2006:206]。

しかし、手記の選別や手記内容の編集には、すべて、学徒兵の＜生の全体＞を毀損する危険がある。もとより、刊行物より原資料を読む方が望ましい。しかしそれは、限られた人々にのみ可能な方法である。こうした問題は、『わだつみ』に限ったことではない。どんな企画であれ、学徒兵の手記をすべて収めることはできない。そこにはかならず手記の選別が入る。選別は、学徒兵の＜生の全体＞を毀損する。ゆえに読者は、手記の選別基準すなわち編集方針を明示化し、それを距離化し（対象化し）、編集による偏りに留意しつつ読むしかない。ただし、手記の中身が改竄（文言の削除や文章の切断）された場合は、原資料に当る術のない筆者には、修復の術がない。改竄は、資料扱いの邪道である。しかし筆者は、それでも、重要なメッセージは失なわれていないと思うしかない。

『わだつみ』は、軍国主義調の強い手記を除外して編集された。そのことが『わだつみ』の資料価値を狭めたと批判された。しかし筆者はそうは思わない。『わだつみ』には、「細心に読んでいくならば（軍国主義的な表現や言葉さえも）二書（『わだつみ』）の到るところにみちみちている」[日本戦没,1995:488]。『わだつみ』によっても、学徒兵の軍国主義

的な心情・信条の解読は可能である。また、『わだつみ』と『戦没農民兵士の手紙』が比較され、学徒兵と農民兵士の死生観の差異が指摘されたりする。しかし、『わだつみ』に農民兵士に通底する死生観を読み取ることも可能である。学徒兵の意味世界には、社会的な出自を越えた普遍性がある。「偏った属性の人々によって書かれた遺書でも、同じ状況にあった人々の心のうちを代弁するところが多い」[森岡,1995:22]。またアジア民衆との関係の記述について、「本書が欠陥をかかえこむことになった」[日本戦没,1995:505]とも思わない。学徒兵は、とくに第二集で、アジア（とくに中国）での戦争体験を多く記している。ゆえに『わだつみ』に、学徒兵のアジア認識を読むことも可能である。特定の編集方針にもかかわらず、『わだつみ』は、それほどに厚く豊穣なメッセージを読者に伝えている。メッセージを縦横に解読することができるかどうかは、読者の想像力と力量次第である。

解読される「事実」

一部の手記しか読めない筆者には、学徒兵の＜生の全体＞の断片を知るだけである。とはいえ、筆者が読める範囲でさえも、必要な限りの事実は調達できる。そこにも、意味世界が鮮明に表出している。それは思い込みではない。手記解読の方法の賜物である。筆者は、手記を読み、記述の細部に分け入り、文章を分析する。その結果を関連資料と照合し、記述の整合性を確かめる（資料批判）。そのうえで筆者は、学徒兵の＜生の全体＞に接近する。まず、入手できた学徒兵の手記の全体を見渡す。そして、手記の書き手や時期、宛先、目的などを括弧に括り（横に置き）、手記自体の文脈に沿って手記を読む。つぎに、反復される範型的な表現を導き（解読の準則）として、文章の意味を合理的に推論し（意味連関を探り）、その意味を内在的に理解する。さらに、それに他の手記を重ね（比較し）、文章の意味の確かさを検証する。同時に、類似の記述を整理し、類型へ昇華する（類型化）。そして複数の類型を積み重ねる。こうして＜生の全体＞に接近する。筆者は、こうした手順により、認識の「客観性」（科学性）の保持に努める。「合理的推論を可能にする手がかりにより、かつ決死の世代の経験を共有する者としてもつ解読のガイドラインに沿うて、戦没者の意味世界を探り、これをいわば内在的に理解しようとする」[森岡,1995:25]。森岡清美は、これに照応する方法として「重ね焼き法」を提唱する。それは、「資料全体を一つのプールとして扱い、そこに認められている共通特徴を取り上げて論じる」[森岡,1995:22]という方法である。森岡は、そこから「その時代の若者を特徴づける人間類型をあぶり出」[森岡,1995:24]し、人間類型を構成し、それを積み上げて学徒兵の全体像を描写する。学徒兵は、「戦争と死」という共通体験をもった人々である。その体験の共通性が、手記の同質性をもたらしている。このような条件が、「資料全体を一つのプール」として扱う重ね焼き法を可能としている。

意味世界への旅

学徒兵は、死にどう抵抗し、死をどう受容したのか。「私も軍隊に入る時は、それは決死の覚悟で航空隊を志願したのですが、日と共にその悲壮な謂わば自分で自分の興奮に溺れているような、そんな感情がなくなって来て、やはり生きているのは何にも増して換え難いものと思うようになって来たのです。その反面、死ぬ時が来たなら、そりゃ死ねると云

っていても、いざそれに直面すると心の動揺はどうしてもまぬがれる事は出来ません」[白鷗遺族会,1992:44]。筆者は、学徒兵の意味世界を渉猟する。戦死とは、「散華」や「反戦」に回収される単純な事実では断じてない。心の底から軍国主義の学徒兵も、死への道程は遠かった。死とは、それを予感し、紆余曲折する生自体である。生とは、無限に多様な意味の束である。戦争と徴兵の時代に、学徒兵は生を「抵当に入れ」、いわば「死を吊るされて」生きた。生の軌跡と死への道程を遡及し、彼らの複雑で矛盾に満ちた相貌と向き合う。学徒兵の手記は、読者にそのことを迫る。最後に、意味世界の分析の具体的な課題は３つある。一つ、学徒兵の死の苦悶を彩る生活史を分析すること。ここで死の苦悶とは、「思想の崩壊、生の意味の喪失、死の恐怖」をいう。二つ、学徒兵が死を受容する意味世界の構造（なぜ死ぬか）を分析すること。三つ、学徒兵の死の実践（死に臨む態度、いかに死ぬか）の過程を分析すること。……これらを成就して、ようやく学徒兵の＜生の全体＞への旅が終る（筆者はその仮説的な分析を試みた[青木,2008a＆2008b]）。

引用文献

青木秀男,2008a,「悶死と散華の間――戦没学徒の意味世界」広島部落解放研究所『部落解放研究』14 号　79-94 頁.

青木秀男,2008b,「殉国と投企――特攻隊員の必死の構造」社会理論・動態研究所『理論と動態』1 号　72-90 頁.

青木康容,2004,「鎮められない戦争の記憶」中久郎編著『戦後日本のなかの「戦争」』世界思想社　67-88 頁.

大貫恵美子,2003,『ねじ曲げられた桜――美意識と軍国主義』岩波書店.

小田切秀雄・窪木安久編,1970,『日本戦没学生の遺書』読売新聞社.

北川衛編,1967,『あゝ特別攻撃隊――死を賭した青春の遺書』徳間書店.

東大戰歿（東大戰歿學生手記編集委員會編）,1947,『はるかなる山河に　東大戰歿学生の手記』東大協同組合出版部.

中村秀之,2006,「特攻隊表象論」倉沢愛子他編『戦場の諸相』（岩波講座 5　アジア・太平洋戦争）岩波書店　301-330 頁.

成田龍一,2001,『＜歴史＞はいかに語られるか――1930年代の「国民の物語」批判』日本放送協会.

日本戦没（日本戦没学生記念会編）,1995,『新版　きけわだつみのこえ――日本戦没学生の手記』岩波書店.

日本戦没（日本戦没学生記念会編）,2003,『新版　第二集　きけわだつみのこえ――日本戦没学生の手記』岩波書店.

野上元,2006,『戦争体験の社会学――「兵士」という文体』弘文堂.

白鷗遺族会,1992,『雲ながるる果てに――戦没飛行予備学生の手記』日本図書センター.

保阪正康,2002,『「きけわだつみのこえ」の戦後史』文藝春秋.

森岡清美,1995,『決死の世代と遺書――太平洋戦争末期の若者の生と死』（補訂版）吉川弘文館.

安田武,1967,「学徒兵の慟哭――二十一年目の風潮に思う」『展望』97 号　筑摩書房　109-117 頁.